

【論文】

インターネット時代における社会的現実の分裂

成 田 康 昭

1. はじめに

この論文の目的は、インターネットが作り出した新しい日常的現実にある種の亀裂が生じていることを、理論的に示すことにある。情報通信技術（ICT）とニューメディアが切り開いた今日の社会的環境は、多様な社会的接触と機能的な相互作用のある社会空間を実現させている。インターネットの仮想現実はその多くの場面で事実上、現実として機能している。しかし、この現実が社会的にいかなる意義を持っているのか、そもそも、それは「現実」なのか、一面的な現実であるとするなら、それはどこまで「現実化」できるのかという問いは残されたままである。社会関係はICTにおいて情報化され、時間・空間を越えて可能性を広げている。

この論文は、インターネットに媒介された現実が、「真正」の現実か、「擬似」の現実か、あるいは「実りある」現実か、「劣った」現実かといった二者択一を単純に目指すものではない。ICTが圧倒的に登場した現在、目の前に広がるインターネットが作り出す現実には、誰の目から見ても、ある種の違和感が含まれていることは否定できないにしても、それはなぜなのかは、未だ解き明かされていない。

本論の立場は、情報技術に親和的な「社会的現実」と、それと非親和的な「社会的現実」とあるというものである。この二つの「社会的現実」のあいだの裂け目は、メディアと共に生まれたともいえるし、その分裂はメディア史そのものと言って良いほどに古いともいえる。人間にとって「社

会的現実」は進化的に考えれば、その圧倒的に長い期間を、言語によって意思を疎通し、相互に自己を開示しあいながら、比較的小規模な集団を形成して日々暮らす中で成り立っていた。それは、対面した他者との不断の関わりによって維持再生されていたといえる。

文字というメディアは、言語から対面した他者との関わりという条件を、徐々に取り去っていった。書記法や、印刷術、手紙などに、その間の歴史をたどることはできる。しかし、この論文が注意を促したいのは、メディアによって成立した「社会的現実」が圧倒的な情報通信技術によって、オリジナルな現実を凌ぐ存在となっているのに、その根底にある条件には未だ無自覚であるという事実である。

2. 二つの「社会的現実」論

まず、人々が社会的に「現実」とみなしている事実がいかにして成立しうるのかを巡る、全く異なる二つの立場からの議論を参照したい。一つは、言語哲学者のジョン・サールによる発話行為論、志向性、集合的志向性といった言語の機能からのアプローチである『社会的現実の構成（The Construction of Social Reality）』（1995）及び、その続編ともいえる『社会的世界をつくる（Making the Social World）』（2010）である。もう一つは、現象学的社会学の立場からの、「社会的世界のなかで自らの日常生活を営んでいる人びとによって経験されるものとしての『社会的現実』を説明」しようとするものである（Schutz

1962a = 1990 : 86)。具体的には、アルフレッド・シュッツの議論と、ピーター・バーガーとトーマス・ルックマンによる『現実の社会的構成 (The Social Construction of Reality)』(1966)を中心に検討する。

ここで求められるのは、社会的現実は何によって構成されるのか、なぜ人びとはそれを、社会的に現実であるとみなすことができるのかという問題である。いっけん突飛にみえるかも知れないこの二つの「社会的現実」論の対比は、インターネットが作り出した新しい日常的現実を評価するために必要な手がかりを与えてくれるはずである。

(1) サールの「社会的現実」構成論

サールの『社会的現実の構成』が掲げる主要な問いは、「われわれは、いかにして客観的な社会的現実を構成するのか」である (Searle 1996 : xii)。サールは「存在論」の立場をとる。その時、問題となるのは「エベレスト山」や「水素原子」のような物理的対象とは異なり、「現実の世界、客観的な事実の世界には、人間の合意によってのみ事実であるような部分がある。ある意味で、われわれが存在すると信じているというだけで、存在する物がある」という事実である (Searle 1996 : 1)。サールはこれを「制度的事実 (institutional fact)」と名付ける。この制度的事実はいかにして可能となるのか。

サールは「機能の割り当て」、「集合的志向性」、「構成的規則」の3つが社会的現実を説明するという。機能の割り当てという場合、機能はいかなる物理学的現象においても、意識的な観察者と使用者によって外側から割り当てられる。

サールは存在論的に世界の特徴を記述する際に「本来的特徴 (intrinsic feature)」と「観察者相関の特徴 (observer-relative feature)」の区別が重要であるとする。目の前にある物の特徴がセルロース繊維 (木部) と金属からなっているというのは「本来的特徴」であり、それを使う者の目から見て「ネジ回し」であるというのは「観察者相

関の特徴」である (Searle 1996 : 9-10)。「機能」は観察者相関の特徴に属している。「社会的事実を創り出す意識的行為者の能力を議論するときには注意すべき第一の特徴は、物や他の現象への機能の割り当てである。機能は決して本来的ではない、それは使用者や観察者の関心に相関的に割り当てられる (Searle 1996 : 18)。」

「集合的志向性 (collective intentionality)」は人間だけでなく動物にも存在する集合して協働的行動を行う能力の概念である。「私がフットボールの試合でプレーしているオフENSIV・ラインマンであるならば、ディフェンシブ・エンドをブロックしているかもしれない。しかし、私はパス・プレーを実行しているわれわれの一部としてブロックしているのである (Searle 1996 : 23)。」サールは「集合的志向性は個人的志向性に還元される」という、方法論的個人主義の立場をとる大方の見方に反対する。それらの議論は「あらゆる志向性は個々の人間の頭脳の中に存在するので、志向性という形は個人頭脳にのみ関連づけることができる」という考え方に影響されている (Searle 1996 : 25)。私の精神生活が私の脳にあるのは当然だが、「私の集合的志向性がとることができる形は、単に『われわれは意図する』、『われわれはあれこれをしている』といった形である。そのような場合、われわれの意図の一部としてのみ、私は意図している」とサールは主張する (Searle 1996 : 26)。

「構成的規則 (Constitutive Rules)」は、制度的事実を説明する際に重要な意味を持つ。サールは世界を物理学と生物学の問題である世界、すなわちナマの事実 (brute facts) と、文化と社会の世界の事実とに区別し、後者の人間の制度なしには存在し得ない事実を制度的事実とする。制度的事実を説明するために、サールは「規制 (regulative)」規則と「構成的 (constitutive)」規則という区別を導入する。規制規則は道路交通法規のようにあらかじめ活動を規制する。これに対して構成的規則はチェスの規則のように、

「活動の可能性」を創出する。(Searle 1996 : 27) その上で、サールは、制度的事実は構成的規則によって創出されるとしている (Searle 1996 : 28)。

制度的現実においてとくに重要なのは、「宣言 (declaration)」と呼ばれる発話行為 (speech act) である。宣言によって、「制度的事実は、『会議は休会とする』とか『全財産を甥に遺言によって譲る』とか『あなたを議長に任命する』とか『ここに宣戦布告する』のような文の遂行的発話によって創出できる」とされる (Searle 1996 : 34)。

言語的な宣言は構成的規則と結びついて機能する。「一般に構成的規則は、X項が発話行為である場合、その発話行為をY項によって記述される事態を創出する遂行的宣言として機能できるようにする (Searle 1996 : 54)。」したがって、「構成的規則はその機能を発話行為に課すことができるため、その場合適切な状況でその発話行為を遂行するだけで、その機能を課すことを構成することができ、そのため新たな制度的事実を構成する」とされる (Searle 1996 : 54)。また、制度的事実の存在を宣言によって確認することができる。「これは私の妻です」「議会は開会中です」「私はその財産を所有しています」「私はオックスフォード大学の卒業生です」などである (Searle 1996 : 115)。

サールは『社会的世界を作る』(2010) においては、言語の機能について、制度的事実の創出の論理的構造は宣言のそれと同じであることに加え、さらに踏み込んでいる。言語が制度的事実の創出において果たすのは、単なる存在する制度の宣言ではなく、新たな現実の創造であるという。「人間の言語において私たちは、現実がいかにもあり、いかにあってほしいかという両方を表現するだけでなく、現実を存在するものとして表象することによって、新しい現実を表象する能力をもつ。私たちは私有財産、お金、政府、結婚、その他を存在するものとして表象することによって非常に多くの現象を創出する (Searle 2010 : 86)。」

(2) シュッツ、バーガー、ルックマンの「社会的現実」論

サールは、発話行為が現実を創出する力の延長上に社会的現実の構成を描き出したのに対して、シュッツらの現象学的な「社会的現実」論は、「私と同じ他者」がいる日常の世界が現実性の基盤をなしていると考える。そして、そのような共在者との直接的な関係が社会的現実の基点であるとする。

シュッツは、人は複数の現実を意識する存在であるという多元的現実論の立場をとっている。夢の世界、空想的想像物の世界、芸術の世界、宗教的世界、科学的観照の世界、子供の遊びの世界、狂気の世界、これらをシュッツは「限定的意味領域」と呼ぶ。それぞれは固有の認知様式をもち、それ自体のなかで一貫しており、互いに両立可能である (Schutz 1962b = 2004 : 40-41)。これらの意味領域の一つではあるが、「究極的あるいは至高の現実として他の世界から区別される」のが「日常生活の世界」である (Schutz 1962b = 2004 : 38)。この日常の世界においては、以下のことが自然的態度のうちに「疑いない所与」として受け入れられている。

- (a) 共在者たちが身体的に存在していること、
- (b) それらの身体には、私のものと原則的に類似の意識が伴っていること、
- (c) 私の周囲世界にある外的世界の諸事物と、共在者たちの周囲世界にある外的世界の諸事物は同一であり、原則的に同一の意義をもっていること、
- (d) 私は共在者たちとのあいだで相互関係と相互作用を打ち立てることができるということ、
- (e) 私は共在者たちと意思を疎通することができるということ—これは前項の想定からの帰結である、
- (f) 分節化されている社会的あるいは文化的世界は、私と共在者たちにとって準拠枠として歴史的に、しかも「自然的世界」と同じように疑いのない仕方、あらかじめ与えられていること、

(g) 私が自らをそのつどそのなかに見出す状況のうちで、私がおぼろげに自分で作り出したのはそのほんの一部にすぎないということ、以上である。(Schutz & Luckmann 2003 = 2015 : 46-47)

このように、「他の『私と同じ』人間存在」が社会的現実を基礎づけ、日常の世界は現実性そのものの基盤となる。「日常生活の現実とは現実として自明視されている。・・・それは自明で強制的な事実性として、端的にそこに存在する (Berger & Luckmann 1966 = 2013 : 34)。」¹⁾

社会的世界は、制度を含む間接的な経験など様々な経験されるが、その基本となるのは直接的な他者との関係である。直接的な出会いにおいては、他者と空間的に共在し、現在という時間を共有する。シュッツは「私が、他者の進行している伝達の過程に同時性のもとで参与するということは、〔同時であるが〕ゆえに新しい時間次元を確立する。その他者と私、つまりわれわれは、その過程が続いている限りで、共通の生ける現在 (common vivid present)、すなわちわれわれの生ける現在を共有している。そして、われわれ両者に共通する生ける現在は、私とその他者が、『われわれはその出来事を一緒に経験している』と言うことを可能にする」としている (Schutz 1962b = 2004 : 23)。この「ここといま」を共有する「われわれ関係」をシュッツは「対面関係」とも言い換えている。この延長上で、バーガー&ルックマンは「対面的状況にあっては他者は完全に現実的なものとして存在する」としている (Berger & Luckmann 1966 = 2013 : 44)。対面状況は、私に関する内省的な視点よりも先行し、現実性の基盤としての共在者とともに時間的な共有の下で経験される現実なのである。社会的現実はこのように、日常的世界を生きる人の視点から捉えられる。

発話行為論の立場からの社会的現実と、現象学的社会学の立場からの社会的現実、この二つの社

会的現実についての見方は、一見全く接点を持たないように見える。「社会」についての、存在論の立場に立つ発話行為と志向性の理論と、意味の主観的解釈から出発する日常的生活世界の理論には認識論的な共通点は存在しない。本論文の意図は、この二つの立場の社会的現実論を繊細につき合わせることではない。むしろ、この異なる「社会的現実」のモデル、言語の構成力と、他者との空間的共在を、否定しがたい社会的現実のモデルとして、現在起こっている社会変容を解釈したのである。情報通信技術の凄まじい革新とインターネットの急速な普及は、従来の社会的接触の可能性を大きく拡張し、社会的空間とその経験を多様かつ複雑に変容させている。このインターネット状況の社会変容は、社会的現実においていかなる意味を持つのだろうか。

3. 生活世界とマルチモダリティ

(1) Zhaoのインターネットと「日常的現実」論への問い

米テンプル大学のShanyang Zhaoは、2006年の「インターネットと日常的現実の変容：社会学における新しい分析的立場に向けて」という論文で、インターネットが現実の社会的構成に与えた影響を問うている。Zhaoがここで社会的現実論として主に参照しているのは、バーガーとルックマンの『現実の社会的構成』(1966)である。インターネットはわれわれの日常生活に大きな変容をもたらし、個人間の接触の形式も大きく変えた。バーガーとルックマンが日常的世界の現実の基礎として考えた「ここといま」の領域を前提とするコミュニケーション世界の理論は修正を要求されているのではないかというのが、Zhaoの問題設定である。この問題設定は本論文が掲げる問題にも重なる先行研究といえるものであり、ここで紙数を割いて検討する価値がある。

Zhaoはインターネットが人びとの日常生活にこれほど普及し、浸透しているのに、社会学の主

だった考え方は、対面の相互作用を人間の接触の標準と考える傾向があり、電子的に媒介されたコミュニケーションは二次的とみなされるし、インターネットに至っては、有害とみなされていると不満を述べている。そうではなく、インターネットによって起こった日常生活世界の変容を理論は正面から受けとめなければならないとする。Zhaoは次のように書いている。

インターネットの出現とそれに引き続いて起こる社会変容は、われわれが生きている生活世界、とりわけ、われわれが他者と繋がる方法を再編成した。この新しい環境では、対面の相互作用は、個人が「社会的な関係づけ」のために選ぶ多くの選択肢の一つに過ぎない (Zhao 2006 : 471)。

Zhaoによれば、インターネットは新しい空間的・時間的領域、バーガーとルックマンの言う「ここといま (here and now)」に対して「そこといま (there and now)」の領域を、電子的テキスト・チャットの新たなコミュニケーション様式、そして新しい社会的集合の場所、すなわちオンライン・パブリック・ドメインを創ったことにより、社会的環境に大きな変化をもたらした。

バーガーとルックマンは、日常生活の領域は「私の射程内」にある「ここといま」の領域と、到達できない「そことその時 (there and then)」²⁾の領域があったとしたが、Zhaoは電話などによって、そこに変化が始まっていたことに注意を促している。そして、インターネットの地球規模の急速な普及によって、「そこといま」の領域は加速的なペースで広がり続けるだろうとしている (Zhao 2006 : 461)。そして、インターネットにおけるチャットは、文字によるコミュニケーションに、同時性と同期性を導入し、「書くことの永久不変性と、音声を発する同時発生性を統合する電子テキスト・チャットは、インターネットで創られる人間の接触の完全に新しい様式

である」とした (Zhao 2006 : 462)。また、インターネットは、パブリックな人びとが集まる場所を創設した。「電子ネットワークの中のオンラインのパブリック・ドメインは、多対多の接触を共時的にあるいは、非同期的に、匿名の環境において可能」にした (Zhao 2006 : 463)。これは「個人に他者と知り合うことを可能にするたまり場を、対面状況、あるいは『いまとここ』の外側に確立した」ことを意味するとしている (Zhao 2006 : 463)。

こうした変化は、個人が生活世界を構成するやり方に変容をもたらした。生活世界における他者をバーガーとルックマンのように、「仲間」と「単なる同時代人」という2つの領域に分けるとすると、オンラインの知り合いはどちらにも属さない。そのためZhaoはそれを「繋がる同時代人 (consociated contemporaries)」と名づけた (Zhao 2006 : 465)。「繋がった同時代人の領域の出現は、生活世界の匿名性の構造を変える」、なぜなら、オンラインの世界では、匿名性は物理的な距離とも、親密性の段階からも切り離されるからである (Zhao 2006 : 465)。インターネットの出現によって、このように複雑になった個人間の関係様式の領域を、ZhaoはJohn Thompson (1995) にしたがって、「相互作用複合 (interaction mix)」と呼んでいる。さらに、Zhaoはなにげないおしゃべりという、「個人の日常生活を彼の主観的現実を絶えず維持し、変形し、再構成する、会話装置 (Berger & Luckmann 1966 = 2013 : 230)」が現実—維持 (reality-maintenance) のはたらきをするとの、バーガーとルックマンの指摘を受けて、オンライン・チャットにも、同様な機能があるとする。「電子メールとインスタントメッセージングは電話のように、知り合いに頻繁な接触を、物理的に一緒に居ることなく、可能にする」からである (Zhao 2006 : 468)。

こうして「インターネットの出現とそれに引き続いて起こった社会変容は、われわれが生きている生活世界、とりわけ、われわれが他者と繋がる方法

を再編成した」ために、対面における相互作用はもはや決定的な重要性は持っていないとZhaoは結論する。それにかわって、オンライン、電話、対面などのコミュニケーションが、マルチモーダルな構造を作り上げている (Zhao 2006 : 471)。

問題は、バーガーとluckマンを含む、伝統的な社会学の立場が、対面相互作用の様式に分析的優越性を与え、「他のすべての人間的接触の形式は、『派生的』で『疎遠』で、『完全に劣っている』」と考えている点にあるという。「社会的現実のこの変化は、身体的な共在に特権を与える人間の接触における社会学の伝統的な立場を時代遅れにした」、したがって「われわれは、いまや、人間の相互作用の理論をアップデートしなければならない」という (Zhao 2006 : 470)。

(2) 言語における分離可能性

Zhaoの議論はこのように、対面相互作用の形式、「ここといま」のコミュニケーション様式が、インターネット状況の社会的現実の構成を分析するに際して有効性を持つかという点に収束しており、その結論は対面状況を基礎とする理論モデルは「時代遅れ」だというものであった。この論文が書かれた10年前と比べても、チャットに分析上の大きな意味をおきすぎている傾向はあるにせよ、インターネットを介する、社会的コミュニケーションの状況はますます、マルチモーダルになりつつあることは否定できない。

したがってわれわれは、そうしたマルチモーダルなコミュニケーションにおいて、対面相互作用の意味をどのように位置付けるべきか、対面相互作用の本質とは何であるのかという問いに進む必要がある。

Zhaoはバーガーとluckマンを参照しながら、「言語の重要な特性は、コミュニケーションが起こっている直接の環境からの“分離可能性 (detachability)”である。言語を通して、人々は手近には存在しないものを参照し、話し合うことができる。そして、それは対話者が「こことい

ま」のゾーンを超越することを可能にする」と書いている。

バーガーとluckマンによれば、「分離可能性」とは、まずもって、怒りや驚きといった主観性の直接的表現からの分離可能性であり、身振りや合図を含む記号一般が持つ性格である。しかし、言語における分離可能性は、たとえば「そこにはないもの」、一度も直接的に経験したことの無い事柄についても語ることができ、「意味と経験の膨大な蓄積の客観的な貯蔵庫となることができる」無限の多様性と複雑性に結びついている (Berger & Luckmann 1966 = 2013 : 58)。この点は、ソシュールの言語の「恣意性」の原理を待つまでもなく、広く認められた前提といえる。

しかし、より注意すべきは、バーガーとluckマンがこのすぐ後で、会話の「対面的状況における間主観的な緊密性」について書いている点である。

私は話しながら自分自身を聞くのであり、そうすることによって、私自身の主観の意味は私にとって客観的かつまた持続的に接近可能なものとなり、事実上、私にとって〈より現実的〉なものになる。・・・対面的状況のもとでは私自身の存在が近づきやすいものになるには内省を必要とするのに対し、他者の存在については、圧倒的で、持続的で、かつまた内省以前の近づきやすさが存在する (Berger & Luckmann 1966 = 2013 : 58)。

このように、対面的な会話においては、間主観的に現実を「創っている」といえるのである。ところが、Zhaoは「分離可能性と同時発生性は、事実上対面状況以外に使われる記号システムでも見いだされうる」として、チャットの擬似対面状況の可能性に議論をつないでいる。³⁾

バーガーとluckマンの、会話の「対面的状況における間主観的な緊密性」についての議論は、シュッツの「時間パースペクティブ」についての

議論に対応している。そこで、先行するシュッツのこの議論を見ておこう。

シュッツによれば、対面関係にある当事者は、それぞれに内的時間を持っている。その中で、考えを分節化し、ことばをつないで声に出す。また、聞き手は相手の思惟をひとつのまとまりとして理解すべく解釈を行う。しかし、その声、ことばは外的空間に客観的に、出来事として存在する。この話し手と聞き手の双方の内的時間はそれぞれの「生ける現在vivid present」を構成する。しかし、決定的に重要なのは、その過程が共通し、したがって両者は「われわれの生ける現在」を共有しているという事実である。これが対面関係における時間パースペクティブの基礎といえる。「対面関係にある各当事者は、それぞれの相手を生ける現在において把えあっている」のである (Schutz 1962b = 2004 : 24-26)。その時、「私は自分自身の自己に関しては過ぎ去った形でしかとらえることができ」ない (Schutz 1962b = 2004 : 26)。

このことは、Zhaoがチャットを、オンラインの対面関係とみなす視点にとって大きな難点となる。M.ポスターがコンピュータの会話においては「書いている主体は自分自身を直接他者として提出する」と書いているように、チャットの参加者は、対面関係におけるような「生ける現在」を共有することは決してない。自分が書いたことばを、スクリーン上で最初に読むのは自分であり、そのことばをメッセージとして相手に送り出すのである (Poster 1990 = 1991 : 224)。「時間パースペクティブ」は交互ではあるが、共有はされていない。

(3)「対面的接触」というアポリア

Zhaoはバーガーとロックマンが生活世界を、仲間の領域と単なる同時代人の領域という二つの基本的な領域に分けるにあたって用いている基準を分析的に取り出している。

この段落を詳細に読むと、これらの領域の区別が、必ずしも相互に一致しているわけではない2つの基準に基づいて行われていることが分かる。すなわち、他者についての知識 (例えば、相互の熟知) と出会いの形式 (例えば、対面接触) である。同僚は対面の相互作用によって相互に熟知している一方、単なる同時代人は対面の相互作用の欠如によって相互になじみがない (Zhao 2006 : 464)。

しかし、この二つの基準は事実上破綻しているとZhaoは見ている。オンラインの知り合いは、「他者についての知識」という基準を使うと仲間の領域に入るが、「出会いの形式」基準を使えば単なる同時代人の領域に属しているというわけである (Zhao 2006 : 465)。さらに、次のように「生活世界の領域と接触の様式の間には、いかなる固定した1対1の相関関係もない」ことを示す事例をあげる。まず、ショッピングセンターのような「公共的たまり場」では、匿名のまま相互の対面の接触が行われている、さらにオンラインのチャットでは対面の接触なしに相互を知り合うことができる、また、「仲間」であっても、電話をかけたたり、郵便を出したりという接触を行うというわけである (Zhao 2006 : 466)。

しかし、こうした基準を想定するのであれば、先述したシュッツの言う「時間パースペクティブ」の共有というより厳密な基準が要請されるのではないか。例えば、スティーブン・カーンが書いているように、1912年のタイタニック号の遭難は、無線によって非常に多くの人びとが、現在起こりつつある悲劇を見守るといふ、人類にとってほとんど初めての経験でもあった (Kern : 1983 = 1993, 95-98)。大西洋の遠く隔たった彼方に、突然出現した時間パースペクティブの共有に人びとは戦った。事件2日後の『ロンドン・タイムズ』の社説は、無線によって経験の範囲が拡大したことによって、「あの傷ついた巨人の苦痛が大西洋の全地域に響きわたり、・・・巨船が死の

苦しみを味わっているのをこの目で見る目撃者にわれわれはほとんどなる寸前であったことを、畏怖とおぼしい感慨でもって思いたす」と報じたという。より一般化して言えば、メディアの媒介する情報が、空間と時間の固定した関係を解体し、生活世界の構造を複合させ、接触の様式を多様化させたのである (Kern : 1983 = 1993, 97)。

さらに、Zhaoの言うように生活世界における社会関係構築の基準において、古典的な二分法が崩壊し、マルチモーダルなコミュニケーションの構造によって複雑化、多様化しているとしても、接触とコミュニケーションに関する規範や自動化した現実性の判断の基準は簡単には変わらない。いいかえれば、対面的接触に代わる方法が見つかったからといって、人類がこれまで対面的な接触と相互作用の中で構築してきた社会的現実構築の基礎が革新され、更新されるわけではない。

4. 言語・メディア・技術

情報通信技術は、情報を大量に瞬間的に複製・伝送し、空間を縮小させ、多様な記録媒体によって、情報を時間的に延伸・拡張・複製させる。われわれの問題である「社会的現実の構成」にとっては、この情報通信技術はどのように関係するのだろうか。2.で見たサールの「社会的現実」構成論に依拠すれば、社会的現実が人びとに受け入れられる形で構成されるためには、言語が持つ現実構成力が重要な役割を果たしている。サールが事例として示している言語場面はほとんど話しことばであるが、書かれ、送られ、あるいは電話で伝えられるといった媒介によってその構成力に決定的な変化があるといった記述は見当たらない。しかし、言語はその機能に着目しても、歴史的に様々なメディアと結びつきながら、格段に能力を拡張してきた。言語が持つ現実構成力の変容を、情報通信技術との結合の状況から捉えようとするなら、言語が広い意味でのメディアとの関係の中で、どのような構造的変容を経験してきたのかと

いう問題の立て方が必要となる。これは過大な問題であるが、ここでは必要最少限の素描を試みたい。

(1) 「書くこと」という情報技術

言うまでもなく、「書くこと」は言語にとって最初で最大の情報技術革命であった。ウォルター・オングによれば、書くことは意識の働き、文化の構造を根底から変えたという。「書くということは、ことばを空間にとどめることである。こうすることによって、言語の潜在的な可能性がほとんど無限に拡大し、思考は組立て直され」た (Ong 1982 = 1991 : 25)。ことばは書かれることにより、記憶との結合を解かれ、発言される場からの知識の離脱を可能とした。「書く」という技術以前の文化、「一次的な声の文化」⁴⁾では、記憶されないことは存在しないに等しい。そのため思考や知識は「きまり文句」の記憶しやすい形で、型にはまった表現の中に折り込まれる。その意味で「きまり文句」は、経験からの知恵が圧縮されて保存されたものといえる。反面、たとえ最後まで考えぬかれた思考であっても、それを確実に記憶し再現するすべがなければ無駄に終わるしかない (Ong 1982 = 1991 : 82)。

書くという技術は記憶の負担からの解放の一方で、「一次的な声の文化」におけることばの「力動的」な性格を失わせたとオングは見ている。ことばは声であり、音であって、痕跡すら残さない、力によって生み出される「できごと」である。このことが、「一次的な声の文化」に生きる人びとが「まず例外なしに、ことばには魔術的な力があると見なしている」ことに関係しているとオングは言う。(Ong 1982 = 1991 : 75) ほぼ10万年前と推定される言語の獲得から、紀元前数千年に文字が作られるまで、つまり、人類史のほとんどの時間、ことばは、実際の空間を共有し、声を聞くことができなければならないという条件から免れることはなかった。書くという技術は、「ここといま」という声によるコミュニケーションの条件

からの離脱を意味していた。

もちろん、古代エジプトでもシュメール文明でも、神聖文字（ヒエログリフ）や楔形文字は神官組織によって支配され、知識の独占のために使われ、政治組織の成長を阻害した。しかしハロルド・イニスが書いているように、たとえばエジプトではパピルスと毛筆の使用の増大は行政神聖文字（ヒエラティック）を発達させ、専門職としての書記の成立を伴い、書くことと考えることは世俗化された（Innis 1951 = 1987 : 48-53）。

オングはクランチーの研究を参照しながら、書かれたものが、社会構成力に結びつくのはそう簡単ではなかったという事例を記している。11~2世紀のイギリスでは、行政的な場面でも、書かれたものがあったとしても、声としてのことばの重要性の方が勝っていたという。たとえば「1127年、サンドウィッチ港の入港税が、カンタベリーの聖アウグスチヌス修道院のものか、クライスト・チャーチのものかという紛争を解決するため」には「良い証言ができる、年齢を重ねた知恵のある長老達」の証言が必要であった。テキストは証言ほど信用がおけるものではなかった。「証言に対しては聞いたですることができるし、本人に反論させることもできるのに、テキストに対してはそんなことはできないから」というのが理由である。文書を証明する公証人の手続きが発達したのはもっと後になってからであった（Ong 1982 = 1991 : 199-200）。

アルファベットは紀元前1,500年頃に地中海東部で作られた、とヴィレム・フルッサーはみている。アルファベットはヒエログリフなどとは違って、商人のために作られ、「生き方の脱宗教化をもたらす」ものであったという（Flusser 1996 = 1997 : 110）。つまり「アルファベット（=エリート層のコード）と画像のコード（民衆のコード）との戦い」、「計算する（歴史的な）意識とイメージ化する（呪術的な）意識との戦い」という対立が、ゲーテンベルグの印刷術までの1,300年間続いたと言う（Flusser 1996 = 1997 : 110-111）。

フルッサーは、アルファベットによってコード化されたテキストは、写真と映画を始祖とする「テクノ画像」という新しいコードに転換されるというが、ポール・レヴィンソンは、アルファベットは言語の可能性を拡大していくという、フルッサーとは別な方向を考えている。

レヴィンソンは、『デジタル・マクルーハン』の中で、マクルーハン理論をインターネット状況に適用することを試みている。マクルーハンの「聴覚的空間」の概念は、文字の出現以前の世界、「境界がなく、情報が固定された場所からではなく、あらゆる場所から生み出される世界」を指している（Levinson 1999 = 2000 : 90）。したがって、オングの言う「一次的な声の文化」の世界に対応する空間である。アルファベットはちょうどその対照的な位置にある「視覚的空間」と位置付けられているわけだが、レヴィンソンは、インターネット状況において、この見方を逆転させることを試みている。「聴覚的空間が現在最も多く見られるのはサイバースペースにおけるオンラインのアルファベット環境である」というのだ（Levinson 1999 = 2000 : 90）。

レヴィンソンによれば、アルファベットは、その起源においては孤独なメディアであった。テキストは「一度にひとりしか読めず、複写するにも文字通り1ページずつ人間が書き写さなくてはならなかった。」その意味でそれ以前の壁や碑に書かれた象形文字より閉じられたものであった。この孤立は、印刷機によるテキストの大量の複写によってある程度反転したが、もちろん、印刷部数などから見て、その量的な限界は明らかであったとレヴィンソンは言う（Levinson 1999 = 2000 : 93-4）。しかし、アルファベットがインターネットを通じて画面に表示されることによって、「印刷よりはるかに身近で直接的に遠方まで広がりを持つ聴覚的空間のコンテンツになると同時に、その媒介にもなった」という（Levinson 1999 = 2000 : 94-5）。「オンラインのアルファベットのコミュニケーションの容易でインタラクティブな

性質は・・・聴覚的性質の根本的な原動力を回復し増強する」(Levinson 1999 = 2000 : 96-7)。確かに、インターネットはきわめて大量のユーザーが利用可能な形で、発信と受信を行い、その関係において双方向を実現するという意味で、印刷技術が作り出した文化とは、まったく形の異なる媒体の空間を作り出している。さらに、レヴィンソンは、アルファベットの抽象作用が非常に高いという点を強調する。この抽象作用への着目は、フルッサーの「計算する意識」とも対応するが、インターネットにおいては、これは「テクノコード」に置き換わるようなことはなく、むしろ「聴覚的なサイバースペースのガイドとしてのアルファベットの地位は非常に安泰だといえる」としている (Levinson 1999 = 2000 : 102)。

(2) サイバースペースの間テキスト性へ

ことばは「書く」という技術を得た段階から、「情報」となる道を一步一步進んできたといえる。アルファベットのような中立的で記号的な文字と結びついたことは、その情報化を一気に加速させたともいえる。「一次的な声の文化」におけるような声を出して話し、その場で、全身で反応しながら聞くということばは、情報通信技術との親和性は全くないといえる。しかしことばはその形態変化の中で、情報通信技術との明らかな親和性を獲得していった。

『仮想現実のメタフィジックス』を書いたマイケル・ハイムは、その中の「情報狂 (インフォマニア)」という章で、1980年代の、コンピュータによるワードプロセッシングについて書いている。「コンピュータを使って書くと、言語は電子的なデータとなり、機械は意味よりも情報を強化する (Heim 1993 = 1995 : 12)。」この認識は、言語が新たな情報通信技術と結合する段階に至ったことを示している。

ここでマイケル・ハイムは、技術への駆動力が言語を通じて人間の内面にまで達するとするハイデガーの見方に注目している。ハイムは、以下の

ようなマルティン・ハイデガーのことばを引用している。

言語機械は、機械的なエネルギーおよび機能を通して、前もってわれわれの潜在的な言語利用の様式を制御し、調整する。言語機械は、現代技術が言語の様式、言語の世界をコントロールする一つの方法なのであり、それは今も進んでいる。人間が言語機械の主人であるという印象は未だに保たれているが、実際には、言語機械が言語の管理を受持っている、むしろ人間存在の本質の主人なのかもしれない (Heim 1993 = 1995 : 9)。

言語が技術に支配されることに異議を申し立てることが重要なのではない。ハイムもハイデガーはラッダイトではないと言っている。「言語に関する技術は、他の道具よりも、われわれの本質的な部分に属している。技術が言語に触れるとき、それは同時にわれわれの生きている場所に触れている (Heim 1993 = 1995 : 10)。」そのために、不可避免的に言語機械に依存するわれわれは、人間の精神的な駆動力の本質としての言語と情報技術の接合という状況に直面する。

この段階で想定されていたのは、コンピュータを介して言語に向き合う人間である。人間が言語機械の主人であるという関係が脅かされているとしても、その関係から社会的現実が生み出されるという認識には至っていない。このような問題のとらえ方は、哲学、倫理学からの情報通信技術の領域への研究一般にも見られる傾向でもある。⁵⁾しかし、むしろ今日のインターネットが作り出している状況は、こうした、人間と言語機械の、道具と主体の閉じた関係では捉えきれない拡がりを見せている。この関係を捉えるための手がかりとなるのは、ミヒャエル・バフチンとツバタン・トドロフによって示された「対話」と、そして「間テキスト性」という原理である。

バフチンは、対話にこそ言語的現実の基礎があ

るとした。「いっさいの言語表現は、相手へと、聞き手へと方向づけられている」とバフチンが言う (Todorov 1981 = 2001 : 337)。たとえ、その場に物理的に聞き手や話し相手がいなくとも、内的発話やモノログであっても、また、書かれたテキストであったとしても、この原理は変わらない。いかなる発話も、話し手と聞き手の存在を同時に要求する「両面的な現象」である。「どんな個々の発話も、言語コミュニケーションの連鎖の一環なのである」とバフチンが繰り返し主張する (Бахтин 1979 = 1988 : 177)。

このバフチンの対話関係 dialogisme を、トドロフは「間テキスト性 intertextuarité」と言い換えている。バフチンが意図していた関係は、対話者の関係ではなく、「すべての発話のあいだの関係」を指しているからである (Todorov 1981 = 2001 : 112)。この一般化によって、様々な「テキスト理論」が一気に展開したのは周知のことである。テキストは他のテキストとの関連において存在しているという間テキスト性は、インターネットの言説空間において顕著である。レヴィンソンが言うように、印刷されたテキストよりも、インターネットのサイバー空間では、きわめて容易く、広く、思っても見なかったテキストと相互に関連づけられるからである。

遠藤薫は、インターネットやマスメディアを含め、「多層化したメディアが異なる回路間で双方向的な共振を引き起こしていくような社会を『間メディア社会』と呼ぶ」としている (遠藤 2014 : 9)。インターネット状況においては、SNS もマスメディアや報道機関からの発信も、組織や機関からの発表も、広報発信も、情報が相互に関係しながら、自己組織化していく。この間テキスト性は、インターネットが言語の対話的、コミュニケーション的特性を急速に拡張した結果であるといえよう。このような、インターネットにおける間テキスト的な言語空間が、バーチャルな言語空間のリアリティを作り出している。

5. 「近接性」と責任

シュッツらの「社会的現実」論は2.で見たように、日常的世界における、私と同じ人間存在たる他者との共在が、社会的現実の基盤をなしていると考えられる。バーガーとルックマンはコミュニケーション場面においても、それが現実性をもって経験される条件として「対面的関係」をあげる。ここで問題となるのは、情報通信技術が飛躍的に発達し、普及したインターネットによって日常的にこうした技術に媒介される生活が展開しているなかで、「社会的現実」の条件はどのように変容しているのかという問題である。3.で見たように、Zhaoはこの問題を検討し、インターネットによって広がったマルチモーダルなメディアを介した「繋がる同時代者」達が作り上げる社会関係を語る際に、対面状況に基礎を固定した理論モデルは「時代遅れ」になっており、いまや、相互作用の理論をアップデートしなければならない時だと結論づけた。

しかし、Zhaoによって語り残された問題がある。それは、「ここいま」の共在者との関係が社会的に形成していた現実性の局面はどう変容したのか、という問題である。人間の共在とは何であったのか、それは失われたのか、変質したのか、共在という要素なしにコミュニケーションは現実性を持って成立するのか、といった問題に答える必要がある。

(1) サイバースペースの倫理学

アンソニー・ギデンズは、共在について、アーヴィング・ゴフマンに導かれながら、描写を試みている。

共在は身体の知覚およびコミュニケーションの様相に投錨されている。ゴフマンの言う「共在の十分条件」が見出せるのは、行為者が「他者を経験することも含めて、各自が行っていることが相手に知覚されるほどに、

また知覚されているというこの感覚が知覚されるほどに、近接している」場合である。「共在の十分条件」が存在するのは、身体的に存在する者たちが、何の媒介も経ずに接触している場合に限られる (Giddens 1984 = 2015 : 97)。

この共在の定義によれば、共在とは、行為者が自己と他者の相互的な知覚と、身体的な存在が、メディアに媒介されることなく直接的に相互を経験することである。しかし、ここではコミュニケーションの様相と、「共にある」という要素は未分化に混ざり合っている。この点はシュッツらの「社会的現実」の理論においても同じである。対面的関係、あるいは共在が、社会的現実の条件となるのなら、それは、何らかの分析的な要素として取り出されうるものなのか。

この問題に関して、手がかりを与えてくれるのは、ロジャー・シルバーストーン (2003) の「適切な距離 (Proper Distance)」という論文である。「サイバースペースの倫理学に向けて」という副題のついたこの論文の目的は、「情報コミュニケーション技術による社会的関係の媒介が、ますます強力で、双方向的になっているという主張と、その結果とを問うこと」だとされている。この作業にあたってシルバーストーンが宣言している立場は、「道徳的生活の可能性は、われわれ自身と他者の関係において適切な距離を明瞭にし、それを維持するという能力に依存している」が、メディア技術はそれに影響を及ぼしているのではないかという点にある (Silverstone 2003 : 470)。

この論文の鍵となっている概念は「近接性 proximity」である。シルバーストーンは、ジグムンド・バウマンと共に、エマニュエル・レヴィナスの近接性という道徳的な概念を受け入れている。以下は、シルバーストーンがバウマンの『ポストモダン倫理学 (Post modern ethics)』から引用した部分であるが、より文脈に注意するために、前後を付け加えて引用しておく。

モダンの社会は社会空間を刷新することにおいて専門化した。それは、道徳的近接性 moral proximity をもたない公共圏を創造することを目指した。近接性は親密性と道徳の領域である。距離は疎遠と法の領域である。自己と他者の間には、いかなる気ままでも予測できないねじ曲げる影響も、信頼できない権力の余地も、わがままな道徳的衝動としての、普遍的な立法への抵抗もなく、法的な規則によってのみ構造化された距離がある。服従を求める自己利益に訴える限り、法の支配は存在し、そして、そこにある、あるいはあり得る、最高のサービスを届けると約束されることが期待された。法の支配は、自己利益に合致するものを求める個人を助け、励まし、そしてそのやり方を示すことが約束された。・・・略・・・いったん近接性の自然な住いから追放されると、情愛 (affection) は国民国家の抽象的で、想像された全体性に、再方向付けされることができた。これは、個人を直接的な近さから引き離し、その中で生が生きられた他者の集まりを道徳的に干からびさせた。・・・略・・・もし、ポストモダニティが、モダニティが急進的に追求した野心の袋小路からの非難所であるならば、ポストモダン倫理学は〈他者〉Otherを隣人として、身近に打ち解けたものとして、道徳的自己の硬い核の中に、再承認するものになるであろう。それは計算された利益の荒地から、追放された地へと戻り、近接性の自律的で道徳的な重要性を回復する倫理学；道徳的自己がその本領を発揮するプロセスにおいて、〈他者〉を決定的な人格として、配置し直すような倫理学であるだろう。(Bauman 1993 : 83-84)

レヴィナスにしたがって、バウマンも、シルバーストーンも、近接性とは、空間的、物理的な概念ではないとする。直接性や近隣が近接的であるというのは妄想である。『近接性』は倫理的状

況の固有な質」であり、むしろ「距離の抑制」であるとされる。近接性の適切な意味としてバウマンがいうのは「『人間性』を前提とする」ことである。(Bauman 1993: 87)

バウマンは(シルバーストーンもまた)近接性には責任が含まれるとしている。「道徳的な命令に責任がある(したがって、自由である)領域(Bauman 1993: 86)。レヴィナスはこれを「近接性」と呼ぶ、この責任の概念を知るためには、シルバーストーンが引用している次のレヴィナスの一節が適当であろう。

〈他者〉に接近することによってだけ、私は私自身居あわせることになる。・・・語りにおいて私は〈他者〉からの問いかけにさらされ、応答することを迫られ——現在の鋭い切っ先によって——私は、応答することの可能性(responsibility)〔責任〕として生みだされる。私は自分の最終的な実在に連れもどされる。⁶⁾ ——エマニュエル・レヴィナス、『全体性と無限』(Silverstone 2003: 469)

応答可能性は、たとえばプラトンの『パイドロス』にも、書かれたことばについて語るソクラテスのことばがある。「それがものを誇っている様子は、あたかも実際に何ごとかを考えているかのように思えるかもしれない。だが、もし君がそこで言われている事柄について、何か教えてもらおうと思って質問すると、いつでもただひとつの同じ合図をするだけである」(Plato = 2011: 166)。「一次的な声の文化」においては誰も、考えても見なかったであろうが)知識や情報のありようにおいて、「答えることができること」は根源的な問題である。しかし、応答可能性(=責任)は近接性との関係で捉えると、コミュニケーション形式としての双方向性には還元できない問題群が広がる。

物理的空間では対面的場面であれば、隣人も見知らぬ人もすぐ近くにいるしその道徳的存在も

はっきりしている。しかし「媒介された空間では、隣人も見知らぬ人も届かない遠くにいる。他者の道徳的な不在(または存在)は、その物理的不在によって過度に決定されている(または徐々にむしばまれる)」とシルバーストーンは書いている(Silverstone 2003: 481)。「見知らぬ人は隣人である。そして、いま、われわれすべては互いに隣人である」(Silverstone 2003: 478)。サイバースペースでの倫理学として、シルバーストーンが示すのは、「倫理的スタンスは、他者が隣人であるか否かには依存しない。そうではなく、この認識によれば、私は、見知らぬ人に対して、その他者が身体的にも、形而上学的にも私から遠く離れているとしても、隣人に対すると同等の責任をもつ」ということなのである(Silverstone 2003: 480)。

(2) サイバースペースは「現実的」な社会空間になれるか

われわれの問題に戻ろう。シルバーストーンは、「インターネットは、距離を超越し、実質的に真実の近接性を生み出すことによって他者の顔を露わにすると主張する」が、この「自然なコミュニケーション、もしくは、対面のコミュニケーションの権威性と真正性を、暗黙的にも明示的にも再生させるというインターネットの能力の主張」は正当化されるだろうかと問う(Silverstone 2003: 482)。この問題を考えるにあたってシルバーストーンは、技術は道徳的であり得るのかという問いを発している。そして、これに対する「技術はその場面では、ユーザーとしての、また、媒介している対象としての、われわれの道徳性を負っている」し、われわれは何世紀もの間、人間でないものに権限を委ねることができているだろうという主張を退ける。われわれは特定の技術の社会的価値を問うことができるが、技術にはそれができないという意味での非対称性があるからだ。技術は道徳的な責任を代行することはできない。「技術はケアしない。技術はケアすることができ

ない」のだ。「われわれ自身の倫理的感情を技術に委任できるという仮定は、道徳的生活のための前提条件としての責任の固有の中心的位置を読み誤る」、*「人への残忍さにおける最も重大な行為のいくつかは、まさにこの委任において発生した」*からである (Silverstone 2003 : 483)。

その上で、「メディアとコミュニケーションの技術が可能とした道徳は、容易く接続する能力を、しばしば、機能と思ひ込む」ことに注意を促す (Silverstone 2003 : 483)。シルバーストーンは、われわれが切実に道徳的な接続を必要としていることを認める。「それは飛び抜けてすぐれている。・・・われわれに、想像を超えた可能性を提供する。」しかし、「われわれが地に足をつけた倫理を追究するのなら、われわれは接続 (connection) を越える必要がある」という (Silverstone 2003 : 483)。技術的な意味での回線の「接続」は、道徳的な「共在」と同一視することはできない。それを前提とする限りでなら、「技術的に媒介されたコミュニケーションは、倫理的にわれわれに力を与えるかもしれない。」それが「適切な距離を決定する」という問題だという。

さらに、シルバーストーンは、サイバースペースのコミュニティとアイデンティティに関する主張を検討している。オンラインの関係においては、「一方で、アイデンティティは流動的であり、簡単に偽装されうる。他方、にもかかわらず、そのような流動性がコミュニティと呼ばれるものに帰着する」というパラドックスがある (Silverstone 2003 : 484)。サイバースペースであろうとあるまいと、どこでもアイデンティティは道徳的エージェントとして、コミュニティと相互に絡み合っている。しかし、「サイバースペースでは、重要で相互依存している関係は、切り離され、無視される」とシルバーストーンは言う。仮想コミュニティでは「単数カテゴリーとしてのアイデンティティに対する拒絶と同時に、行動と欲望の焦点としての自己を主張するという皮肉がここにはある」というのだ (Silverstone 2003 : 485)。

シルバーストーンは Nancy Baym のオンライン・コミュニティについての分析⁷⁾を参照しながら、次のように書いている。

この分析は、サイバー空間においてグループを編成するという可能性と、重要な個人の役割を、その空間を共にする、カギとなるサイバーな人格として認める。しかし、いわゆるオンライン・コミュニティが責任を創造し維持できるということは認めない。「社会的現実参加者がその目的にかなうメッセージを作るために言語と利用できる資源によって、インタラクションを通してつくられる」というケースになりうるにも関わらず、そこでの社会的現実とはそれまでの自分が、他者とは無関係に信じる機能的で独我論的な合理性 (solipsistic rationality) にしたがって、説明される。そして、オンラインの社会的行動は必然的に、また本質的に、ボランタリーで、おそらく、つかの間のものであると認めることを押しつける。他者は障害とはならない。他者は避けられることもできる。(Silverstone 2003 : 485)

このような「社会的現実」の構成は、4.の議論から言えば、言語が身体的存在から離れて、ネットワークの中で、間テクスト的、対話的なコミュニケーション的特性を拡張した先に形成されるリアリティであるといえる。サールは社会的現実の構成にとって「他者」を必要な要素とはしていないのだ。だが、もちろん、これはシュッツのいうような、共在にもとづく「社会的現実」ではない。

また、Barry Wellman と Milena Gulia の議論⁸⁾を参照しながら、シルバーストーンはオンライン・コミュニティが「個人の非公式の対人的な結びつきの社会的ネットワークが、半ダースの親しい友人から、数百のより弱い結びつきに変化している」という結論を紹介している。そこで呈された「パーソナル・コミュニティ」という着想とは

「おそらく究極的な段階なのだ。まさしくポストモダンのナルシスティックな動き、そこでは、コミュニティが概念的にも、経験的にも、そして、皮肉または反省なしに、自我の投写でありかつ、拡張でもあるのだ」という（Silverstone 2003 : 486）。こうして、「サイバースペースのコミュニティを擁護することはできない」というのがシルバーストーンの立場である。

シルバーストーンの結論は二つである。一つは、「いかに、メディア機械media machineが洗練され、人間らしい存在として振舞うとしても、道徳的な義務はメディア機械に委任されることはできない（Silverstone 2003 : 487）。」そして二つめの結論はオンラインの生活においては、「アイデンティティは分裂し、コミュニティは消失し、殻と幻想だけが残って」おり、そこにあるのは「独我論的で、ナルシスティックなパフォーマンスと、技術的に可能とされた万能の概念である（Silverstone 2003 : 488）。」

われわれはバーチャルな他者と直面する可能性のある場面での「適切な距離」の新しい倫理学、軽いクリックで失われられないような他者との倫理を必要としている。われわれに課されているのは「媒介された他者との交渉において、いかにして責任をもってふるまうことができるかという問題（＝適切な距離）に取り組む」ことであるとしている（Silverstone 2003 : 488）。

社会的現実を構成する条件としての、共在と対面的関係から、他者との倫理的関係における近接性にまで延長する議論を見てきた。もちろん、レヴィナスもシルバーストーンも、社会的現実の条件については何も言っていない。しかし、シルバーストーンもいうように、対面した関係の中では、倫理的ポジションは自ずと明確である一方、インターネットにおけるバーチャルな関係では、互いの倫理的ポジションや責任は曖昧にならざるを得ない。たとえば、何らかの協働のため、あるいは何かを共有するための「信頼」という要素を媒介させて考えてみる。人がある空間を社会的に

「現実的」と考えるには、そこにいる他者との信頼が前提となる。つまり、倫理的次元における「現実性」が問われなければならない領域がある。もちろん、Nancy Baymが持ち出したように、「独我論的合理性」によって、他者とは独立に社会的現実を、場合によってはまったく孤立して作り上げることも、可能である。現代のわれわれの社会は、そのような条件を生み出しているに違いない。ここで、暫定的に確認すべきは、社会的現実の根拠がこのように分裂した状態にあるという点である。

6. おわりに

本稿は、二つの「社会的現実」論を並べるところから出発した。この二つは、驚くほど異なる前提に立っているので、かえって、人びとが社会的な関係の中で「現実」として受け入れるものを巡るモデルとしてみることができるのではないかという、いささかナイーブな意図からであった。この二つの「社会的現実」論を一つのモデルとして、情報通信技術下のインターネット状況を見ることで、インターネットが作り出した新しい日常的現実にある種の亀裂が生じていることを見出そうとしたのである。

オンラインの制度的現実とは現在、きわめて広範に見られるものとなっている。オンライン・バンキング、オンライン・ショッピング、オンラインでの納税システムなど、オンラインで多様な個人的で制度的な行為が可能である。これらのシステムにおいて、われわれは「サイバーな顧客」、「サイバーな消費者」、「サイバーな納税者」となっている。しかし、その最大の脅威は「なりすまし」であり、詐称である。つまり、アイデンティティの複製であり、偽造である。それを回避するための個人認証は、ますます複雑化されている。納税システムのように、マーケットが介在していないシステムはとくに、利用者を遠ざけようとしているかのように複雑にされている。

政府機関、自治体、団体、医療機関、企業、店舗などが構えるHP群が形成しているバーチャルな社会は、既に十分なリアリティを持って「社会」を呈示している。SNSが作り出している言説空間は、間テクスト的な共鳴と共振を繰り返しながら、瞬時に膨張と変形を繰り返している。確かに、それは人びとの「声」そのものと見える。したがって、いまさら、その「現実性」を問うという問題設定に違和感があることは想像できる。これらの圧倒的な利便性は否定すべくもない。ここで問題にしたかったのは、そうしたバーチャルに展開した現実、われわれの日常の地続きとして存在しているのかという問題であった。

モデルとしての社会的現実論から見えてきた点は二つある。第一に、基本的な社会的構成要素としての言語である。言語という機能は、それ自体が情報となって、社会的現実構成のルートを通じて、社会空間を情報化させている。情報化している以上、情報通信技術の高度化によって、その社会空間の質と量はますます、加速的に高まる。社会空間は情報通信技術という宇宙船にまるごとのせられて、想像を超えたところに、膨張の波に乗って運ばれているという情景である。これを、「社会的現実Ⅰ」と呼びたい。

もちろん、インターネットがなければ実現できなかったことも、社会的現実Ⅰには数限りなく存在する。たとえば、発信の広汎性と受信の検索収集機能によって、身の回りの現実の世界では決して出会うことができないような（難病、悲惨な境遇、性的マイノリティ、差別、一風変わった趣味などを共有するような）相手との巡り会いも、インターネットであれば可能である。

第二に見えてきたのは、対面した関係の中で、親密な関係、地域生活の密接なつながりの中で共有する空間、一見どう見ても今日、疲弊している領域である。シュッツが「共通の生ける現在」と呼んだ次元、これを「社会的現実Ⅱ」と呼びたい。ここには、双方向性などのコミュニケーション的要素には還元し得ない現実性、道徳的存在として

の人間的存在も含まれている。社会的現実Ⅱは、情報通信技術との親和性が極端に低い。というか、現状に忠実にいえば、情報通信技術によってこの「現実」を実現させたいとする論者、すでに実現できているとする論者と、シルバーストーンのように断固としてそれをはねのける論者の戦場となっている。キーワードで示すなら、社会的現実Ⅰは「言語」、社会的現実Ⅱは「倫理」に象徴的に代表されるということになろうか。

いうまでもなく、この二つの社会的現実、もともとは一つであった。人類史の大部分を通して、われわれは一つの社会的現実を生きてきた。日常生活を共に過ごし、語り合い、争い、維持させてきた。書字を獲得し、手紙のような運搬・通信手段をもち、印刷を手にしても、それらはまだ、一つの社会的現実の管轄下に置かれていたといえる。しかし、電話という、空間的な「遠隔」を、「現在」という地平において結びつける電子メディアの「現実」には手を焼いているようだ。「オレオレ詐欺」の被害が絶えないように。

実際、人びとが「現実」と信じている事柄の裏側には、常にこうした嘘や裏切りが存在している。言い換えれば、人は騙されるまで、「現実」を触知できない。人は「現実」を確認しながら日常生活を過ごしたりはしない。フィッシング、偽サイト詐欺、オークション詐欺、不正アクセスなどの存在は、現在、コントロールしきれない社会的現実の領域がいかに増えているかを示してもいる。

社会的現実Ⅰと社会的現実Ⅱの亀裂は現在も拡がり続けているように見える。ネチケットや、インターネット・リテラシーでは、(被害を減らすことはできても) 亀裂を解決することはできないだろう。本論の問題意識の範囲というなら、シルバーストーンのいった「適切な距離」とは、サイバー空間に対する倫理的な命令というよりも、社会的現実Ⅰと社会的現実Ⅱの間の分裂を、適切な距離に保とう、という切実な呼びかけであるように思える。

注

- 1) バーガー&ルックマンの『現実の社会的構成』は、「日常生活の現実」、「客観的現実」、「主観的現実」の3部構成となっている。このうち、「客観的現実」についての図式はシュッツの議論とは相容れない。しかし、「日常生活の現実」については、ほぼシュッツの社会的現実についての議論を踏襲しているため、その限りで、ここでは両者を同等なものとして扱う。
- 2) ただし、Zhaoの記述とは異なり、バーガーとルックマンの『現実の社会的構成』においては「そことその時 (there and then)」は明示的には書いていない。
- 3) Zhaoもこの点について、「相互に、直接的に聞き、そして応える、同時的な言語的交換の能力が、対話者に内的な意識の流れを「同期させ」、そして「不断の、同時化された、相互的な接近」をもたらす」という言及を行っているが、その点は十分に展開していない。
- 4) オングは、書くという手段を持たない「声の文化」を「一次的な声の文化」と呼び、書字を持つ「声の文化」を「二次的な声の文化」と呼び分けている。
- 5) Lucas Introna (2007) はメディア技術への現象学的アプローチの論者だが、ハイデッガーの立場に近い論者を中心に、情報通信技術 (ICT) への現象学的な研究を、「道具存在論」、「構築主義的存在論」、「現象学的存在論」などにわけながら広く概観している。彼が目指したのは「ニューメディアとICTが意味をもつことを可能にするような地平」を開くことだが、そこで分かったのは、それが「特定の基本的な理解または社会的技術的な関係についての仮定によって条件づけられる」ということである。議論そのものが、立場の表明に還元されてしまいかねない問題を孕んでいる。彼は「しかしながら、それらのアプローチにおける最も深刻な限界は、ICTとニューメディアによって提起される社会的、倫理的問題にアプローチする際に根底にある仮定が、まったく気付かれていないか、無自覚であるということである」と結んでいる (Introna 2007 : 327)。
- 6) この翻訳は岩波文庫版、熊野純彦訳 367-368 頁を参照した。

- 7) Baym, N. K. (1995) "The Emergence of Community in Computer-Mediated Communication." In Steven G. Jones (ed.), *Cybersociety: Computer-Mediated Communication and Community*. London: Sage, 138-163.
- 8) Wellman, B., and M. Gulia (1999) "Virtual Communities: Net Surfers Don't Ride Alone." In M. A. Smith and P. Kollock (eds.), *Communities in Cyberspace*. London: Routledge, 167-194.

文献

- Бахтин, Mikhail M., "Зстетика словесного творчества", M., Искусство, 1979 (= 1988, 佐々木寛訳「ことばのジャンル」新谷啓三郎, 伊東一郎, 佐々木寛訳『ことば 対話 テキスト—ミハイル・バフチン著作集 8』新時代社.)
- Bauman, Zygmunt, 1993, *Postmodern Ethics*, Oxford: Blackwell Publishers.
- Berger, Peter L., and Thomas Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality : a Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York: Anchor Books. (= [1977] 2013, 山口節郎訳『現実の社会的構成：知識社会学論考』（初版タイトル：『日常世界の構成：アイデンティティと社会の弁証法』）新曜社.)
- 遠藤薫, 2014, 「なぜいまジャーナリズムを考えるか」遠藤薫編, 『間メディア社会の〈ジャーナリズム〉 ソーシャルメディアは公共性を変えるか』東京電気大学出版社, 1-17.
- Flusser, Vilém, 1996, *Kommunikologie*, (= 1997, 村上淳一訳『テクノコードの誕生：コミュニケーション学序説』東京大学出版会.)
- Giddens, Anthony, 1984, *The Constitution of Society : Outline of the Theory of Structuration*, Cambridge [Cambridgeshire] : Polity Press. (= 2015 門田健一訳『社会の構成』勁草書房.)
- Innis, Harold A., 1951, *The Bias of Communication*, Toronto : University of Toronto Press. (= 1987, 久保秀幹訳『メディアの文明史：コミュニケーションの傾向性とその循環』新曜社.)
- Introna, Lucas, D., 2007, "Making Sense of ICT: New Media, and Ethics," Mansell Robin, Chrisanthi Avgerou and Danny Quah eds., *The Oxford*

- Handbook of Information and Communication Technologies*, Oxford : Oxford University Press. 314-327.
- Heim, Michael, 1993, *The Metaphysics of Virtual Reality*, Oxford : Oxford University Press. (= 1995, 田畑暁生訳, 『仮想現実のメタフィジックス』岩波書店.)
- Kern, Stephen, *The Culture of Time and Space 1880-1918*, 1983 (= 1993, 浅野敏夫訳『時間と空間の文化』上巻, 法政大学出版局.)
- Levinson, Paul, 1999, *Digital McLuhan : A Guide to the Information Millennium*, London : Routledge. (= 2000, 服部桂訳『デジタル・マクルーハン: 情報の千年紀へ』NTT出版.)
- Ong, Walter J., 1982, *Orality and Literacy : the Technologizing of the Word*, New York : Methuen. (= 1991, 桜井直文, 林正寛, 糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店.)
- Plato, *Phaidros*, (= 2011 [1967] 藤沢令夫訳『パイドロス』岩波文庫.)
- Poster, Mark, 1990, *The Mode of Information : Poststructuralism and Social Context*, Cambridge : Polity Press. (= 1991, 室井尚, 吉岡洋訳『情報様式論: ポスト構造主義の社会理論』岩波書店.)
- Schutz, Alfred, 1962a, *The Problem of Social Reality (Phaenomenologica ; 11 . Collected Papers Alfred Schutz ; I)* edited and introduced by Maurice Natanson, Hague : M. Nijhoff. (= [1983] 1990, 渡辺光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題I』マルジュ社.)
- Schutz, Alfred, 1962b, *The Problem of Social Reality (Phaenomenologica ; 11 . Collected Papers Alfred Schutz ; I)* edited and introduced by Maurice Natanson, Hague : M. Nijhoff. (= [1985] 2004, 渡辺光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集 第2巻 社会的現実の問題II』マルジュ社.)
- Schütz, Alfred, and Thomas Luckmann, 2003 *Strukturen der Lebenswelt* UVK Verlagsgesellschaft (= 2015, 那須壽監訳『生活世界の構造』筑摩書房.)
- Searle, John R. [1995] 1996, *The Construction of Social Reality*, London: Penguin Books.
- Searle, John R. 2010, *Making the Social World : the Structure of Human Civilization*, Oxford: Oxford University Press
- Silverstone, Roger, 2003, "Proper Distance : Toward an Ethics for Cyberspace," Gunnar Liestøl, Andrew Morrison, and Terje Rasmussen eds., *Digital Media Revisited : Theoretical and Conceptual Innovation in Digital Domains*, Cambridge, Mass. : MIT Press, 469-489.
- Todorov, Tzvetan, 1981, *Mikhail Bakhtine : le principe dialogique suivi de Écrits du cercle de Bakhtine*, Paris : Seuil. (= 2001, 大谷尚文訳『ミハイル・バフチン対話の原理: 付バフチン・サークルの著作』法政大学出版局.)
- Zhao, Shanyang, 2006, "The Internet and the Transformation of the Reality of Everyday Life: Toward a New Analytic Stance in Sociology" *Sociological Inquiry* Volume 76, Issue 4 November 2006, Peter B. Wood eds., Pages 458-474, Issue online: 29 September 2006 <http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/j.1475-682X.2006.00166.x/abstract>